

さくらのひと、みっけ！

「やさしく まじめに おもしろく」をモットーに 紙芝居を通して広がる心の繋がり



はたなか ひろゆき
畑中 廣之 さん

畑中廣之さんは、自作の紙芝居で全世代を魅了する「紙芝居先生」です。以前は小学校教諭で、定年退職後の現在は非常勤講師となった畑中さん。授業の教材のひとつとして、紙芝居を制作したことをきっかけに、現在も紙芝居の制作を続けています。

紙芝居で重要なのは、肉筆で描かれた絵や場面が移り変わる「抜き」のタイミングだと畑中さんは言います。右から左へと場面が移り変わることによってリズムを感じ、見ている人を退屈させません。

デジタルでは伝えることのできない躍動感や興味の湧く演出ができるのは、紙芝居ならではの長所です。

紙芝居を制作するにあたり、畑中さんが大切にしているテーマは、命・平和・人権・歴史だと言います。そこには、世代を越えた繋がりを広めたいという思いが込められています。

これまでの活動を通して畑中さんが印象に残っていることは、紙芝居を披露した児童たちから、感想を綴った文集を貰ったことです。その文集は、今も畑中さんにとって頑張る原動力となっています。

「子どもからお年寄りまでが、共感して繋がる場所作りのため紙芝居を作り続けたい」と畑中さん。これからも、自作の紙芝居を通し心の繋がりを広めていきます。

共に生きる

「地域猫活動」って知っていますか

「地域猫」という言葉を聞いたことはありますか。避妊・去勢を済ませて、地域で世話をされている猫のことです。

猫が好きな人はたくさんいると思います。野良猫を見かけると、癒されますね。でも、猫が嫌いな人も地域には暮らしています。庭に野良猫が入ってきて花壇を踏み荒らしたり、排せつをしたりして困っている人もいます。

猫は繁殖力が高く、1匹の母猫から1年間に生まれる子猫・孫猫の数は50匹以上になります。そうすると猫の被害が増え、猫が嫌われ者になってしまいます。

そこで、野良猫に去勢・避妊手術を施して元の

場所に返し、地域の人が決まった時間に餌をやり、トイレの世話をする「地域猫活動」がボランティアの皆さんによって行われています。世話をすれば被害が減り、繁殖しなければいずれ野良猫は少なくなっていきます。外に猫がいなくなると寂しいと感じる人もいるかもしれません。しかし、外の世界は猫にとっては実は過酷で、事故や病気、人間からの虐待の危険に常にさらされています。それに、野生動物が猫に狩られて被害を受けることも、深刻な問題になっています。

地域猫活動は、猫と人が共に生きるための一つの方法なのです。動物に優しいまちは、人に優しいまちでもあるのではないのでしょうか。